

稲沢市一色青海遺跡出土の 絵画土器について

樋上 昇

本稿では、平成21年度に発掘調査をおこなった稲沢市一色青海遺跡から出土した、鹿の絵を描いた絵画土器を紹介する。併せて、これまで愛知県内から出土している弥生～古墳時代に属する、鹿の絵を描いた絵画資料についても簡単に触れることとしたい。

一色青海遺跡の概要

一色青海遺跡は愛知県の北西部、稲沢市のほぼ中央に位置し、東は三宅川、西は日光川にはさまれた沖積低地に立地している。

おもに日光川上流浄化センターの施設建設に伴って、平成3年度以来、愛知県埋蔵文化財センターが断続的に発掘調査をおこなっており、平成21年度までに合計36,124㎡を調査している。

遺跡の所属時期は、弥生時代と鎌倉～戦国時代の2時期に大きく分けられる。

弥生時代の遺構は中期後葉（凹線紋期）に限定され、それ以前、それ以降ともに人が居住した形跡は全くみられない。ただし、一色青海遺跡の東には野口北出遺跡（弥生前～中期中葉）、南には須ヶ谷遺跡（縄紋晩期末～弥生中期中葉）があり、これらの集落の居住者が一色青海遺跡を成立させたことは疑いない。

地形的には、北西から南東に流れる河道によって形成された、東西約300m、南北約70mのU字形を呈する幅の狭い微高地上に展開しており、おおむね東に方形周溝墓群、西に居住域が広がっている。

居住域では、これまでの調査で約270棟の竪穴建物、約30棟の掘立柱建物を確認している。このうち、集落中枢部とみられる平成15年度調査区（03A・B区）と、平成21年度調査区（09A・B区）において、竪穴建物約170棟と掘立柱建物約20棟を確認しており、特に長辺が10mを超える大型竪穴建物は、03B区と09A区に集中している（図1）。多くの建物は、

地形に制約されていることもあり、主軸の方位がきれいに揃う点が特徴である。

竪穴建物は比較的同じ箇所での建て替えが多く、重複の激しい箇所では5～6回もの建て替え痕跡が認められる。未調査箇所を考慮すれば、竪穴建物の数は累計で300棟を超えることは間違いない。これを単純に最大重複数の6で割ると50棟という数字を導きだすことができる。ただ、直接の重複関係をもたなくとも、同時併存が困難なほど近接した竪穴建物も存在することを考慮すれば、少なくとも40棟前後の竪穴建物が同時期に存在していた可能性が高い。

また、平成15年度の調査（03A区）で確認した掘立柱建物SB017は、南北（桁行）17.6m、東西（梁間）5.1m、床面積89.8㎡を測る巨大なもので、弥生中期後葉としては、東日本で最大級の掘立柱建物である。

竪穴建物に較べて、方形周溝墓の数が格段に少なく、かつ、墳丘の一辺が15mを超える大型周溝墓は皆無である。このように、居住域と墓域の規模がきわめてアンバランスなことも、本遺跡の特徴といえる。

集落の北を流れる河道（400NR）は、集落成立後の比較的早い時期に埋没する。その後は河道の痕跡に沿って、幅約5m、深さ約1.5mの大溝を掘削している。この大溝も2条の重複が認められる（200SD・600SD）。これら河道・大溝からは、木製品・カゴ類が多数出土している。木製品には、二連の直柄平鍬を始めとする未成品のほか、斧柄などがあることから、これらを利用して木製品を製作していたことがわかっている。

 $\approx 0.2 \text{ } \mu\text{m}$

鹿の絵の土器

本稿にて紹介する鹿の絵を描いた絵画土器は、09B 区の大型土坑 1257SK から出土した。

この 1257SK 周辺には、掘立柱建物 5 棟と大型土坑群約 20 基が集中している。

うち、掘立柱建物 1773SB と 1752SB は、柵列 1772SA とともに一定の規格で建てられていることから、これらは同時併存していた可能性が高い。このうち、2×2 間の総柱建物 1752SB は、重複する 4 棟の竪穴建物が廃絶したのちに築かれていることから、これら 2 棟の掘立柱建物は、集落存続期間のなかでも後半に属することは確実である。また、4×1 間の掘立柱建物 1773SB は、北西隅から 2 番目の柱穴が、1257SK と同規模の大型土坑に切られている。これらのことから、1257SK は、間接的ではあるが、これら掘立柱建物群よりも新しく、集落存続期間のうちでも最終段階に近い時期に掘削されたと考えている。

鹿の絵は、図 2・3 に示したように、筒形土器と呼ばれる砲弾形を呈する土器の外面に描か

れていた。口縁部と底部は欠損しているが、図 4 の最上部に示した朝日遺跡出土土器のように、口縁部は斜めに切り落としたような形状であった可能性が高い。底部はおそらく丸底とおもわれる。外面調整は縦方向の細かなナデで、内面は縦方向のヘラケズリののち、ナデをほどこしている。なお、筒形土器は、朝日遺跡からは比較的多く出土しているが、一色青海遺跡からの出土は、これが初例である。

鹿の絵は体部外面に、縦方向に 6 頭、頭部を右にして描かれている。土器焼成前に、まず、浅く線刻で下書きをおこない、その上から、同じく焼成前に、ベンガラを用いて面的に塗っている。胴部より尻尾にかけては、器面の剥落が著しく、遺存状況は悪いが、上の 2 頭に関しては、線刻が比較的よく残っている（図 3）。

線刻は、通常の線刻土器（図 4）よりもかなり浅いことから、当初からベンガラを塗ることを想定した、あくまでも下書きとして描かれていたようである。頭部は耳あるいは角を V 字に描いたのち、鼻先を描いている。頸部は 1 本線、胴部は 2 本線で表現し、胴部を描いたのちに、足を描いている。

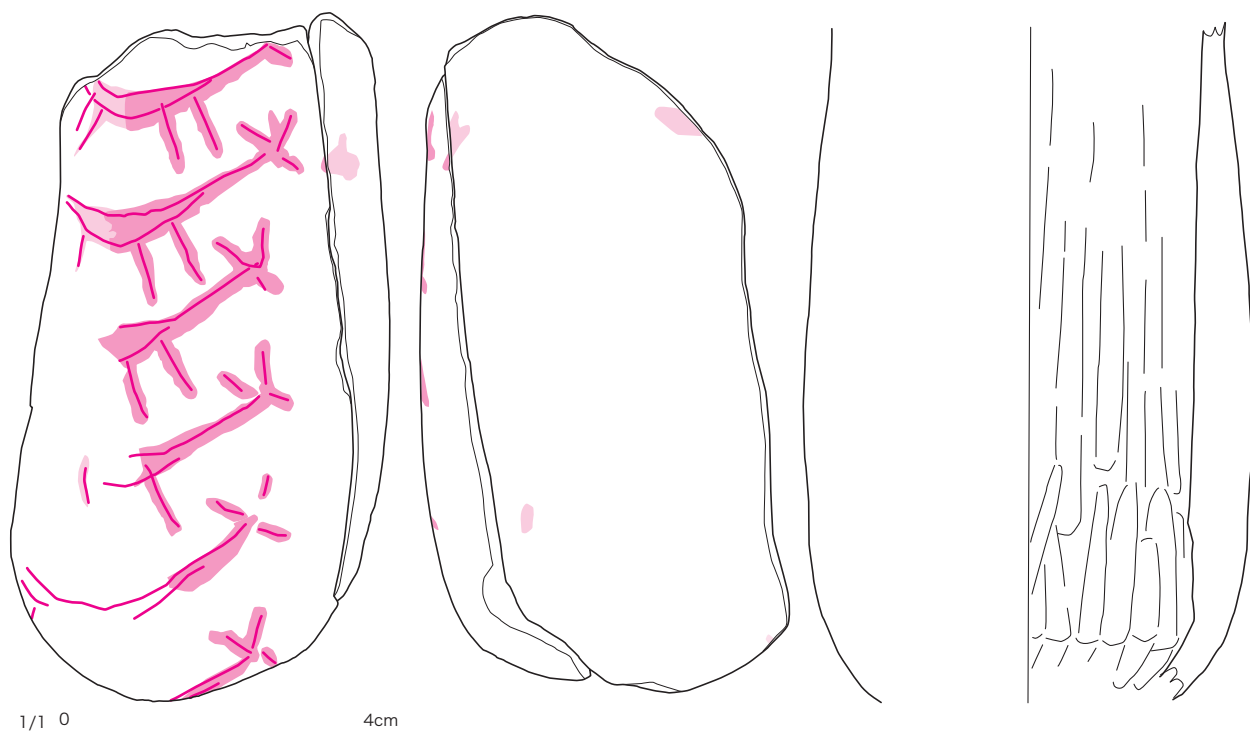


図2 一色青海遺跡出土の絵画土器（S=1:1）



図3 一色青海遺跡出土の絵画土器写真

ベンガラを塗った工具は不明だが、面的にある程度の幅をもって描かれていることから、筆状のものを使用していた可能性が高い。

右側の破片にも若干ベンガラが付着しているが、鹿の絵状に復元することは困難であり、かつ、線刻が遺存しないことから、絵として描いたものではなく、偶然付着したのであろう。

まとめにかえて

橋本裕行氏によると、弥生時代の絵画土器はこれまで600例ほどあり、そのうちの4割が鹿の絵とのことである。ただし、鹿に限らず、これまで出土している絵画土器のほとんどは、線刻によるものであり、線刻の上に顔料を塗ったものは、福岡県朝倉郡夜須町（現・筑前町）の太木遺跡から出土した92号甕棺（弥生中期前葉）の口縁部付近に描かれた、線刻の鹿に黒色物質を塗った1例のみである（図5、夜須

町教育委員会 1997）。

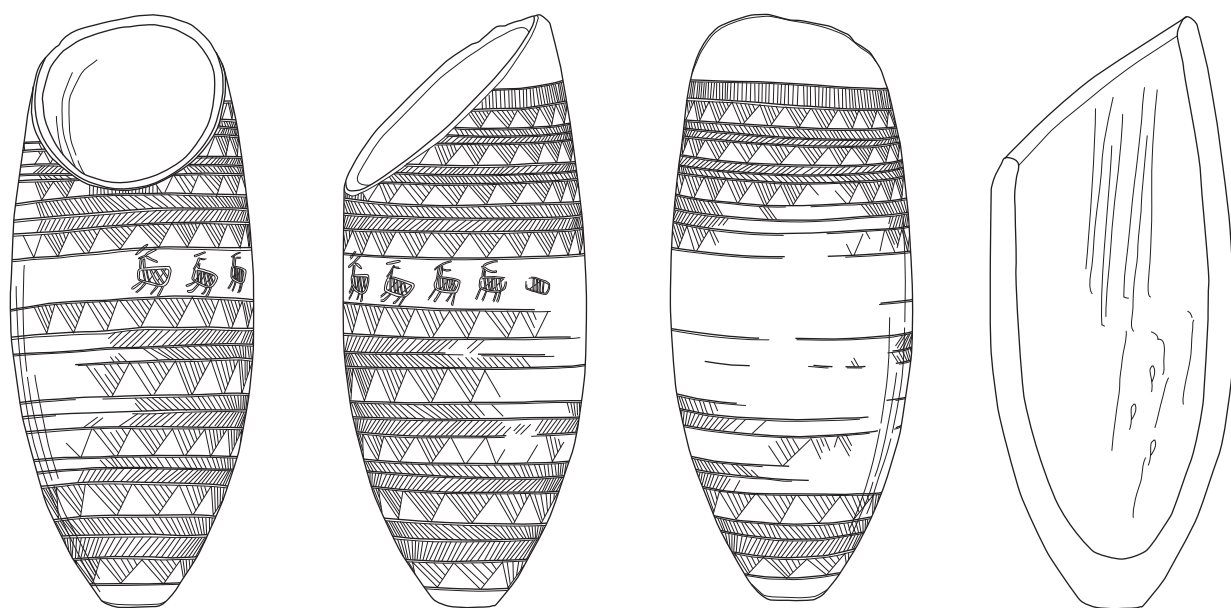
ゆえに、今回の一色青海遺跡出土例は、顔料による弥生時代の絵画土器としては2例目であり、ベンガラを用いたものとしては、全国で初例となる（深澤芳樹・橋本裕行氏のご教示）。

愛知県内では、これまで鹿の絵画土器・土製品は図4にあげた7例（本例で8例目）が知られている。このうち、朝日遺跡VIIIの報告書に掲載されたもの（図4上）は、筒形土器という点で、今回の出土例と共通している（愛知県埋蔵文化財センター 2009）。

一色青海遺跡では、平成15年度の調査で、03B区SK0750から、線刻で鹿を描いた土製垂飾が出土しており（愛知県埋蔵文化財センター 2008）、絵画資料としても、鹿の絵としても、今回は2例目となる。

弥生時代の鹿の絵は、前期末に北部九州で出現し、中期には特に近畿地方で盛行する。

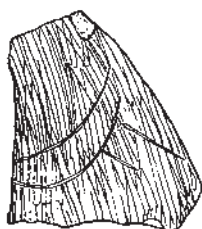
深澤芳樹氏によると、描き方としては、頸部



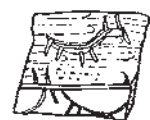
朝日 VIII-05Da-SK63-d034



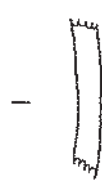
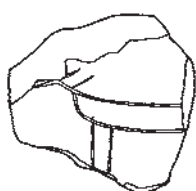
朝日 V-2075 (部分)



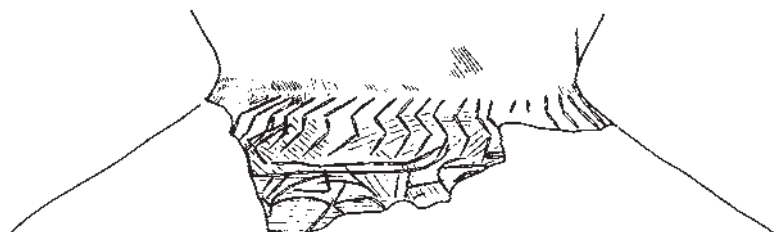
朝日 V-2076



朝日 V-2077

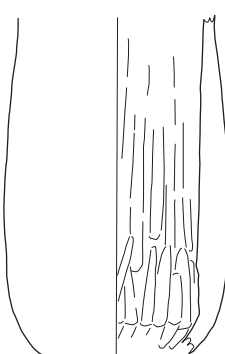


神明 -49

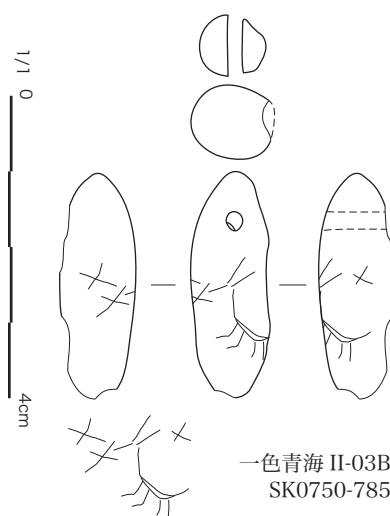


朝日 V-2081

1/2 0 10cm



一色青海 09B-1257SK



一色青海 II-03B
SK0750-785

図4 愛知県内出土の鹿の絵画土器・土製品 (S=1:2・1:1)

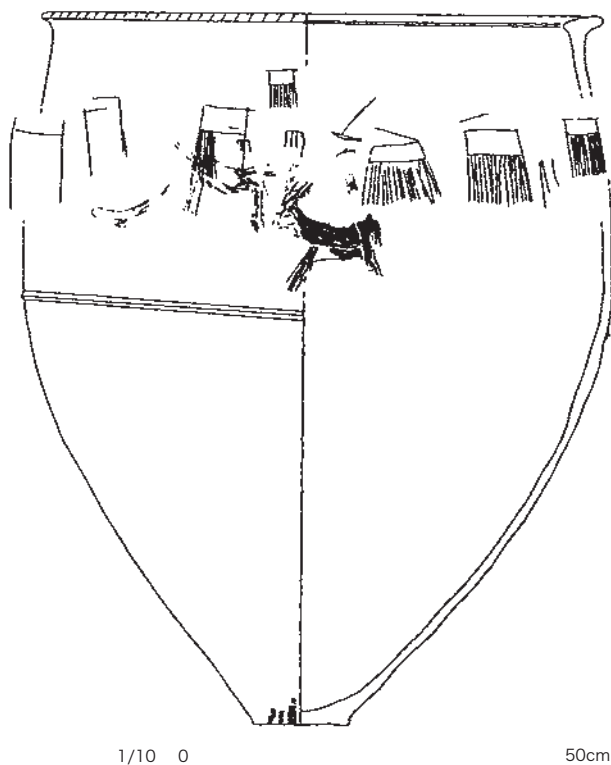


図5 大木遺跡出土の甕棺

から尻尾までをすべて1本の線刻で表現するもの（図4の朝日V-2077の下の鹿）が最も型的に最も古く、その後、胴部を2本線で描くようになり、のちには頸部まで2本線となる（同・上の鹿）。頭部は、耳あるいは角をV字に描き、鼻を1本の別の線で描くのが古く、のちにはこれがつながるようになるのである。

一色青海遺跡出土の鹿の絵は、前回・今回ともに、頸部は1本線、胴部は2本線で描いており、頭部は鼻を別に描いていることから、比較的古い要素を留めているといえよう。

今回の一色青海遺跡の調査では、河道および大溝から、全面にベンガラを塗布した小型壺、赤彩カゴや、同じくベンガラを塗布した赤彩弓などが出土しており、これらとの関連も注目される。

これらベンガラの原料をどのようにして手に入れているのかが、今後の課題となろう。

なお、本稿の執筆にあたっては、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の深澤芳樹氏、奈良県立橿原考古学研究所の橋本裕行氏から多くのご教示を得たことを記し、ここに感謝の意と致します。

参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 1994 『朝日遺跡Ⅴ（土器編・総論編）』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2008 『一色青海遺跡Ⅱ』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2009 『朝日遺跡Ⅷ』
- 安城市歴史博物館 2001 『弥生の絵画 倭人の顔—描かれた2000年前の世界—』開館10周年記念特別展図録
- 大阪府立弥生文化博物館 1992 『弥生の神々—祭りの源流を探る—』平成4年春季特別展図録
- 大阪府立弥生文化博物館 1996 『卑弥呼の動物ランド—よみがえった弥生犬—』平成8年春季特別展図録
- 大阪府立弥生文化博物館 2006 『弥生画帖—弥生人が描いた世界—』平成18年春季特別展図録
- 佐原 真 1980 「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』第66巻第1号、日本考古学会
- 滋賀県立安土城考古博物館 1994 『弥生の祈り人—よみがえる農耕祭祀—』春季特別展図録
- 設楽博己編 2006 『原詩絵画の研究 論考編』六一書房
- 豊田市教育委員会 1996 『神明遺跡』
- 常松幹雄 2006 「鹿と鉤の回廊」設楽博己編『原詩絵画の研究 論考編』六一書房
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986 『絵画と記号—唐古・鍵遺跡調査50周年記念—』特別展図録
- 橋本裕行 1988 「東日本弥生土器絵画・記号総論」『橿原考古学研究所論集 第8 創立50周年記念』吉川弘文館
- 橋本裕行 1989 「弥生時代の絵物語」工業普通編『古代史復元5 弥生人の造形』講談社
- 橋本裕行 2006 「弥生絵画研究のあゆみと展望」『弥生画帖—弥生人が描いた世界—』大阪府立弥生文化博物館平成18年春季特別展図録
- 春成秀爾 1991a 「角のない鹿—弥生時代の農耕儀礼—」『日本における初期弥生文化の成立』横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ
- 春成秀爾 1991b 「絵画から記号へ—弥生時代における農耕儀礼の盛衰—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集
- 春成秀爾 1992 「鳥・鹿・人」『弥生の神々—祭りの源流を探る—』大阪府立弥生文化博物館平成4年春季特別展図録
- 深澤芳樹 2006 「鹿と羊」『弥生画帖—弥生人が描いた世界—』大阪府立弥生文化博物館平成18年春季特別展図録
- 夜須町教育委員会 1997 『大木遺跡』
- 野洲町立歴史民俗資料館 1993 『倭人の絵画』展覧会図録